

龍山中学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7364823>

出版情報：国際教育文化研究. 3, pp.1-14, 2003-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



龍山中学校について ——在朝鮮「内地人」学校の事例研究——

稲葉 継雄

はじめに

龍山中学校は、1909年の京城中学校、1913年の釜山中学校、1915年の平壤中学校に次いで1918年に開設された。在朝鮮「内地人」中学校としては4番目（大田中学校と同時創立）の伝統校であるが、京城中学校の「居候」的な存在として誕生し、独立後も常に京城中学校と競合関係にあっただけに、龍山中学校は、いわば出来のよい兄をもった弟の悲哀を長く味わうことになった。しかし、第2代の高木校長時代（1932年3月～1940年3月）には、「その差を十年近くかゝって縮め、京中と肩を並べるに至った」⁽¹⁾といわれている。本稿の最大の狙いは、龍山中学校が対京中コンプレックスを克服し「京中と肩を並べるに至った」プロセスを追跡することである。

龍山中学校の大きな特色のひとつは、その存続期間の大部分（1918年4月～1944年3月）が僅か3人の校長によって担われたところにあった。彼らの平均在任期間は8年8ヶ月に及び、龍山中学校の教育体制が非常に安定していたことを窺わせる。そこに見られる学校経営や教員人事の特徴を明らかにすることもまた本稿の目的である。

一. 学校沿革

1917年3月、京城中学校の1917年度入試が行なわれ、本来の京城中学校入学者153名のほか、将来「大田中学校」に収容されることも承知であれば入学を許可するという条件付きの合格者56名（成績は154番以下）が発表された。この56名が、後の龍山中学校第1期生である。彼らについて『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』は次のように記している。

「京城中学校」を受験したのに「大田中学」に収容されることが承知ならば入学を許可すると合格通知を貰い、「大田中学」が出来る迄は京城中学に一時的に通学をと言われ、その「大田中学要員」は別に大田で募集、就学していると聞かされた「新設校要員」としての新入生五十余名の心裡は如何であつたであろうか。日を逐うにつれて不安は増大し、更には「他所者」視され「居候然たる立場」からも一刻も早く脱却したい気持で一杯であつたことと思われる。⁽²⁾

1917 年夏、朝鮮総督府学務局は、京城府内に新設する第 2 中学として龍山中学校を決定し、校長の人選、校舎予定地の確保など開校準備に着手した。福島亦八の令息龍郎（龍中第 8 期生）の回想によれば、1917 年 8 月に福島亦八が龍山中学校長就任の要請を受け、早くも 9 月には受諾している。⁽³⁾ しかし、それは 1918 年度予算の成立を前提とした内々の動きであって、福島が校長就任を公式に承諾したのは 1918 年 2 月末のことである。

同年 3 月 9 日、京城中学校は 1918 年度入試の合格者を発表した。前年と違って今回は、第 1・第 2 志望と成績とを勘案しての査定であった。その結果、「受験者四百九十三名中合格者は三百八名。其中百五十八名は新設中学校に收容されることになったが、京城中学の方は最高点は九十二点最低が七十五点、新設中学は最高点が八十五点で最低が六十二点であった」。⁽⁴⁾

同年 3 月 30 日、「朝鮮総督府中学校官制」が改正され、朝鮮総督府立龍山中学校が創立された。4 月 16 日、京城中学校預かりとなっていた 2 年生 42 名と新入生 154 名を迎えて、かつて臨時土地調査局であった貞洞の仮校舎で開校式が挙行された。

翌 1919 年 6 月、龍山の練兵場跡に新築中であった校舎が竣工、これに移転し、名実ともに龍山中学校となった。

1921 年 3 月、第 1 期生 37 名が 4 年次を修了、うち 4 名が内地の高校に進学した。いわゆる 4 修での上級学校進学者は、この後暫く 1 桁で推移したが、1935 年以降 2 桁となった。

続いて 1922 年 3 月 8 日、28 名が、晴れの第 1 回卒業式を迎えた。28 名は、京城中学校預かりとなった 56 名のちょうど半数である。卒業式には、総督の代理として柴田学務局長が参席した。ちなみに、その後も龍山中学校の卒業式に総督自身が参列した記録は見出されず、総督が直々に訓示を垂れることが多かった京城中学校とは格の違いが感じられる。

1922 年度から入学定員が 50 名増員されて 200 名となり、4 学級編成となった。ここから、後述するようなエリートクラス「4 組」の問題も派生することになる。

1925 年 4 月、龍山中学校は朝鮮総督府から京畿道に移管され、龍山公立中学校と改称された。

1931 年 11 月 13 日、深夜の出火によって龍山中学校は烏有に帰した。結果的には、火災保険の全額支払いを受け、スチーム暖房装置を備えた最新式鉄筋コンクリート校舎が再建され、いわゆる焼け太りの評も聞かれたが、龍山中学校は、引責辞任によって初代校長福島亦八を失うことになった。新校舎は 1933 年 6 月に完成、そこでの授業は 9 月の新学期から開始された。

満州事変・日中戦争・太平洋戦争の勃発を契機に戦時色はエスカレートし、1944 年になると、学徒勤労動員によって中学校の授業は潰れることが多くなった。そして 1945 年 4 月、陸軍が龍山中学校校舎を接收したため、龍山中学校は、再び京城中学校に居候する身となった。しかし、それはあくまでも形式で、龍中生の授業が京中の教室で行なわれたことはほとんどなかったという。勤労動員に明け暮れていたからである。

8 月 15 日の終戦に続いて 9 月 9 日、米軍がソウル（京城の改称）に進駐した。これに先立って龍山中学校は、日本軍に代わって米軍の兵舎に供されることになり、このときまで残留していた教師と生徒は、明け渡しのための整理を命じられた。整理作業の後の「解散式」の模様を当時の在校生のひとは次のように描いている。

全員校庭に集合し、最後の解散式が行われた。校長訓示のあと、全員直立不動の中を奉安殿から御真影と勅語が宇多川教頭によって厳そかに運んで来られ、朝礼台横の火炎の中に両手高く捧げられた。宇多川先生の純白の手袋が耐えられる限り支えられていたが、遂にガラガラと焰の中に消えて行った光景を思い出す。その後最上級生の旗手が捧げた校旗に残り火が移り、金モールの房から忽ちメラメラと立ち昇る焰が涙を通し霞んで臉に入った。⁽⁵⁾

二. 教員の去就

1. 校長

初代校長福島亦八は、千葉・福島・岩手県立師範学校教諭などを19年間務めた後京都帝国大学に入学、文学部哲学科（教育学専攻）を卒業した篤学の士である。朝鮮総督府の招請を受けた当時は京都の名門立命館中学校の校長であったが、山形高等学校教授への異動が内定していたことから教育者として高く評価されていたことがわかる。

龍山中学校長在任は、1918年4月から1932年3月までの14年に及んだ。1931年11月の校舎火災の責任をとって依願退職したことは前述のとおりである。退官後も朝鮮を去ることなく京城鷺梁津に隠居、敗戦とともに埼玉県のご郷へ帰った。

教育の基本方針について福島は、龍山中学校開校式における学校長式辞の中で次のように述べている。朝鮮総督府立龍山中学校の初代校長であるだけに、総督府の朝鮮統治方針に忠実な福島の姿勢が窺われる。

朝鮮ハ我帝国ノ重要ナル地域タルノミナラス対外ノ関係上極メテ大切ナル位置ヲ占ムルヲ以テ此地ニ於ケル中学校ハ在住ノ内鮮人尙千七百万ノ中堅トナリテ帝国内外ノ発展ニ貢献スヘキ人物ノ基礎教育ヲ施シ以テ曩ニ下賜セラレタル日韓併合ニ関スル詔書ノ精神ヲ貫徹センコトニ努メントス⁽⁶⁾

福島校長時代の龍中生にとって卒業後も忘れられないのは「4組」と「半ズボン」であった。「4組」とは、前述したように1922年に入学定員200名、1学年4クラス編成となつてからの優等生クラスで、学力面で京城中学校に一日も早く追いつくための方便であったが、1～3組の生徒との間に違和感も生んだ。これに関して福島自身、退職後、「私の教育信念は間違っていた」「人間学問丈でない、人情味のある人間を作らねばならない」⁽⁷⁾と語ったという。

制服の半ズボンは、1923年の2学期から採用された。「私も白線二本の帽子に半ズボンの誇り高き竜中に入学できた」⁽⁸⁾という向きもあるにはあるが、京中生が「サルマタと罵倒した」⁽⁹⁾こともあって、多くの龍中生には不評であった。したがって半ズボンは、福島校長の引退とともに長ズボンに変わった。

第2代校長高木善人は、1907年に東京帝国大学文科大学史学科を卒業し、直ちに韓国学部編輯局に入って教科書編纂に従事した。その後、1913年京城中学校教諭、1919年全州高等普通学校長、1925年大邱中学校長、1927年新義州高等普通学校長、1929年京城第二高等普通学校長となり、

総督府視学官（1930～31 年度）を経て 1932 年 3 月、龍山中学校長に就任した。

高木校長の理想は、龍山中学校を「全国中学校の第一位」にすることであった。校長就任辞に次のようなくだりがある。

私は元来平凡で何等取柄のない男であるが、たゞ終始一片耿々の赤誠を以て我が職務に当り粉骨碎身責任を全うし、君国の御恩に報い奉るといふ点だけは何誰様にもひけをとらない決心であります。で学校長及び校友会長としても此の決心を以て努力することゝし、目下全鮮中学校の第一位たらんとしてゐる本校を近き将来に於て確かに第一位であると自他共に認める所まで到らしめ、更に踵いで全国中学校の第一位たるの位置まで進めたいと願つてゐるので、私としては之を本校全員の理想としてどんどん進んで実現したいと思ふのであります。⁽¹⁰⁾

「全国中学校の第一位」はさておき、龍山中学校は、高木校長の在任中（1940 年 3 月まで）に京城中学校とほぼ肩を並べるに至つたとみることができる。

第 3 代校長河野宗一は、広島高等師範学校を卒業して 1916 年、平壤中学校教諭となり、続いて京城師範学校教諭（1922～33 年度）・咸鏡南道視学官（1934～35 年度）・忠清南道視学官（1936～37 年度）を歴任、新義州東中学校（新義州高等普通学校の後身）で初めて校長を務めた（1938～39 年度）。龍山中学校は、校長として 2 番目の勤務校である（在任 1940 年 3 月～44 年 3 月）。

河野校長の常套語は「熱鉄丸を吞下せよ」であった。当時の龍中在校生によれば、「鼻下に立派な髭を蓄え、いつも苦虫をかみつぶしたような、いかつい顔をして、熱鉄丸を吞下せよ、をスローガンにかかげた、ヒットラーばりの人物の印象であ」⁽¹¹⁾つたという。朝鮮での最後の勤務校であった慶北中学校（大邱高等普通学校の後身）における河野評は、次のように一層シビアである。

1944 年 3 月 31 日龍山中学校から来たという河野宗一は、徹底して皇国臣民を叫び、典型的な大政翼賛（その当時、日本の戦争遂行のためこのようなスローガンを掲げた）型であった。彼は、ひたすら日本天皇に対する忠誠心のみ強調した。学園も、面倒を見てやるべき生徒も、全く眼中にない校長であった。⁽¹²⁾

第 4 代校長白井和市郎は、元山中学校長（1939～43 年度）から 1944 年 3 月、龍山中学校長となったことが『朝鮮総督府官報』によって確認される。しかし、太平洋戦争の末期でまともな教育が行なわれていなかったためか印象が薄かったとみえ、『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』にはその名が登場しない。

2. 教諭

龍山中学校開校時の教諭陣は、藤井友吉・上遠野多吉・小田原勇・正井芳樹・幕谷四郎・板倉邦介・金久正儀・佐藤薫之助・藤井善枝の 9 名であった。このうち藤井友吉・小田原勇は京城中学校、正井芳樹は京城中学校大田分教室からの異動、幕谷四郎は京城女子高等普通学校教諭が本

務で龍山中学校教諭は兼務であり、残り5名が福島校長の意向で内地から集められたスタッフであった。とくに上遠野と佐藤は、福島と旧知の間柄であったという。

ところで、「福島先生は永い教員生活の経験に基き、教員が派閥をつくって争うことのないように、教員の出身学校別の配分については、特別に心を用いられた」⁽¹³⁾という。ちなみに上記9名の最終学歴は、藤井友吉が東京高等師範学校、上遠野多吉が東京物理学校、小田原勇が早稲田大学高等師範部、正井芳樹と板倉邦介が広島高等師範学校、金久正儀が東京外国語学校、佐藤薫之助が日本体育会体操学校、藤井善枝が東洋大学である。(幕谷四郎は不明)

藤井友吉は、龍山中学校開設に際して、「幸に教頭候補者を先方に居る人から得たので余程好都合であった」⁽¹⁴⁾と福島校長から感謝されていたが、僅か1年8ヶ月で龍山を離れた。1919年12月仁川高等女学校の教諭となり、校長事務取扱(1920年度)を経て校長に昇任した。藤井友吉は以後、多くの学校の校長を歴任、朝鮮中等教育界の大物となった。校長としての在任校および期間は、仁川高等女学校(1921～22年度)・群山中学校(1923～32年度)・大田中学校(1933～37年度)・釜山中学校(1937～39年度)であった。

上遠野多吉は、龍山中学校に1918～27年度の10年間在職し、数学を担当するとともに、1925年からは教頭も務めた。1928年、咸興高等普通学校の校長に転任した。

小田原勇は、1917年4月、宮崎中学校から海を渡って京城中学校へ赴任、龍山中学校第1期生と5年間をともにして1922年6月、内地に帰った。だが、1期生と小田原の交歓は、小田原の内地帰還後も、そして戦後も長く続いた。龍山中学校第1回卒業式当日の様子は次のとおりである。

我々の第一回の卒業式となった。式後柔道場に一期生全員小田原先生を囲み僅かばかりの菓子とサイダーであったが卒業進学喜びと明日散り散りに別れゆく悲喜交々の昂奮が夜を徹して沸騰した。先生も既に龍中を、朝鮮を離れゆく臍を固めている。「君たちの存在しない学校に残って何の意義があろう。たとえ別離のあとであっても喜びあれば我々にも頗る喜ばしめよ、悲しみに遭ひたるとき知らしめて共に泣かしめよ」と繰返し繰返し言われた。⁽¹⁵⁾

板倉邦介は、1918年4月から1924年度途中まで龍山中学校に在職したが、1935年発行の『朝鮮功労者銘鑑』はこの事実に触れていない。板倉が「朝鮮功労者」に列せられたのは鎮南浦商工学校長としてである。彼は、鎮南浦商工学校長(1935～39年度)の後、大邱商業学校長(1940～41年度)・京城商業学校長(1942～?)も務めている。

佐藤薫之助の龍山中学校在任は、1939年度まで22年に及んだ。その間、「柔剣道以外の部は佐藤先生がすべてリーダーだった」⁽¹⁶⁾といわれており、自他ともに許す「スポーツ龍中」の育ての親であった。

藤井善枝も、1935年度まで18年間在職した後、京城女子実業学校に転出した。龍山中学校在任時の漢文および生活指導は冷酷なほどだったといわれるが、それは「新設の龍中が、京中に負けないようとの一念であった」⁽¹⁷⁾という。

第2代校長高木善人は、総督府視学官から龍山中学校長に就任したので部下を引き連れての赴

任ということはなかったが、第3代校長河野宗一は、新義州東中学校時代の部下赤星丈夫と小山田昌康を龍山に呼んでいる。このほか河野が龍山中学校長となった1940年度に木須好男・朝岡寛一郎・須藤猶一・阿部寿一・岩崎五郎・平川吉一・松田銀治が龍山中学校教諭となっており、ここにも河野の意向が働いた可能性が高い。ちなみに、小山田昌康と平川吉一は、広島高師の河野の後輩である。

先に、開校時からの教諭であった上遠野多吉・佐藤薫之助・藤井善枝の龍山中学校在任がそれぞれ10・22・18年に及んだことをみたが、龍山中学校は校長の交替があまりなかったからか、教諭の在任期間も長くなる傾向があった。たとえば、1926年3月に龍山中学校を卒業した淵上雄道が、京城帝国大学を卒業して1931年4月母校龍中に奉職したとき、3年生の「他の三クラスの担任が何れも恩師」⁽¹⁸⁾だったという。便宜上勤続8年以上を長期在任者としてその氏名・在任期間を改めて列挙すると次のとおりである。

上遠野多吉（1918～27年度）・藤井善枝（1918～35年度）・佐藤薫之助（1918～39年度）・原武雄（1920～27年度）・松永将闔（1920～42年度）・武田豊太郎（1921～40年度）・湯沢豊彦（1922～33年度）・仁田梶長（1923～39年度、以後不明）・長坂真頼（1924～31年度）・清水節（1924～38年度）・大迫静二（1925～32年度）・古賀徳義（1925～36年度）・真玉菊雄（1925～39年度）・和田進作（1925～39年度、以後不明）・鈴木留八（1926～33年度）・島幸治（1926～39年度）・鈴木駿太郎（1926～39年度、以後不明）・渡辺桂造（1926～43年度、以後不明）・河田信雄（1927～43年度、以後不明）・萩原佐平（1927～45年度）・満下静造（1928～40年度）・石黒義保（1929～39年度、以後不明）・翁長俊郎（1929～43年度、以後不明）・宇多川寛道（1929～45年度）・原仙作（1931～39年度、以後不明）・林原操（1931～39年度、以後不明）・淵上雄道（1931～44年度）・寒河江直（1932～39年度、以後不明）・荒木左右（1933～41年度）

上に「以後不明」とあるのは、1940年以降の「朝鮮総督府職員録」には幹部職員のための記載しかないからである。したがって、該当者の在任期間をもっと長かった可能性があり、上記29名以外にも龍山中学校8年以上在任者は当然存在したと考えられる。ともあれ、『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』の「教職員一覧」にある歴代専任教諭は95名であるから、長期在任者の比率は極めて高い。

龍山中学校教員の特徴のひとつとして京城中学校との関係をみると、ひと口で言って京城中学校との縁は薄い。前述したように藤井友吉・小田原勇・正井芳樹が開校時に京城中学校から異動したが、藤井は1919年12月仁川高等女学校へ、小田原は1922年6月静岡県立見付中学校へ転出し、正井は1920年3月、教職を辞して朝鮮銀行員となった。

龍山中学校第2代校長高木善人は、教員生活を京城中学校教諭（1913～18年度）から始めているが、彼の経歴において龍中・京中間に直接の関連はない。

富山民蔵は、1925～26年度の2年間龍山中学校教諭を務め、8年後の1935年京城中学校教諭となった。富山の京中赴任を可能にしたのは、その前の京城帝国大学助手（1927～29年度）や大連出向などのキャリアであったろう。

武田豊太郎は、1921年龍山中学校の教諭となり、1937～40年度は教頭であった。しかし、その後勤めた京城中学校には、武田を教頭として受け入れる余地はなかった。ここに龍中→京中の人

事異動がほとんどなかった理由を見出すことができる。

次に、既述した藤井友吉・上遠野多吉・板倉邦介を除く龍山中学校教諭のその後の校長歴を見てみよう。

西村晃一は、1919年5月、内地から龍山中学校に赴任し、藤井友吉の仁川転出に伴って同年12月、教頭となった。1925年4月、元山中学校長に昇任したが、僅か2ヶ月後、列車から転落死した。

斎藤文治は、龍山中学校教諭(1921～24年度)の後、釜山女子高等普通学校教諭などを経て1936年、羅南女子高等普通学校長となり、1938年に同校が東羅南高等女学校と改名されてからも勤続した(1944年以後は不明)。

一瀬克巳は、龍山中学校教諭(1924～25年度)・京城第二高等普通学校教諭(1925～34年度)の後暫くの経歴が不明であるが、1940年に海州東中学校長、1942年には新義州師範学校長となった。

不破正は、1938年度、全羅北道の朝鮮人学校である全州北中学校(全州高等普通学校の後身)の教頭であったが、龍山中学校には平教諭として着任した。2年を経て1941年、龍山中学校教頭となり、翌1942年、元山高等女学校長となった。

吉崎文三郎は、龍山中学校教諭(1925～27年度)・京城第一高等普通学校教諭(1929～34年度)に続いて仁川中学校で長らく教頭を務め(1935～42年度)、1943年馬山中学校長となった。

松永将闔 23年にわたる龍山中学校勤務(1920～42年度)の最後の年に教頭となり、1943年、清州第一高等女学校長として転出した。

以上のような龍山中学校教員の経歴をみると、龍山中学校教諭(教頭)→他校の校長というルートがなかったわけではないが、京城中学校教員には比すべくもない。

三. 龍山中学校の「学校文化」

そもそも龍山中学校のエネルギーは、「京中が何だ。伝統が何だ。今にみろ。熱鉄一丸となり追付き追越してやるから見てろ」⁽¹⁹⁾という京城中学校への対抗心に発した。京中コンプレックスの裏返しとみてもよい。

1918年4月、2年生を最上級生として発足した龍山中学校は、1921年3月、4修で4名の高校進学者を出し、1922年3月卒の第1回卒業生も、家庭の事情で断念した1名を除き全員が希望校に進学した。したがって龍中生の学力レベルは、当初からかなり高かったといえる。しかし、京城中学校との比較では分が悪く、1930年ごろまで次のような怨嗟の声が聞かれた。

小生(1924年京城日出小学校卒業生——稲葉註)は京城中学受験を申告したところ、「お前の成績ではだめ! 竜中にせよ。」といわれ、むかつとして「どこへ行こうと勝手にしょう。」といい返した。⁽²⁰⁾

(1925年当時——稲葉註)父と相談の上、京中を志望した。その後父が学校に呼ばれ、竜中に

変更しませんか、京中には定樹君は保証出来ませんが、竜中なら太鼓判を押します、と言われた。⁽²¹⁾

今回（1930年——稲葉註）新に、第一回同窓会会報を発行し、会員各位に名簿及会則を配布する運とまでなりました。

形だけは整った、建築工事と言ふならば、やつと基礎工事が終つたといふ程度で、最も重要な時期に際して居ます、本校創立のスタートに於て京城の二等級扱ひにされた我々は、その辛酸を忘れぬのみか、未だに受験に際しても、京中、龍中の振分けをされてゐる、悲しむべき事実に対しても、我々の使命は永久性であります⁽²²⁾

ちなみに、1926年の京城帝国大学予科第1回修了生140名のうち京城中学校出身者は28名、これに対して龍山中学校出身者は5名に過ぎなかった。ところが、1929年入学の京城帝大予科第6回生のトップは龍中卒の市川朝彦であった。市川は、「いつ勉強をするのか、学校の成績は常に1等であった。2等とは大差の1等であった」⁽²³⁾という。市川朝彦の存在は、龍中の学業面での京中追い上げを象徴していたであろう。1931（昭和6）年ごろの龍中と京中の関係は次のように描かれている。

福島先生のたゆまざるご努力は、遂に立派な実を結び、龍山中学校第十回の卒業生（昭和六年卒）の出る頃には、龍中は、一学年四クラス、全校生徒千人に近い、すぐれた中学校となり、上級学校進学に於ても、体育運動の競技に於ても、龍中と京中は優劣なく、京中は龍中を、龍中は京中を、互によき競争の相手と考えるようになったのである。⁽²⁴⁾

この引用は初代校長福島亦八追悼文の一節であるから、運動競技面はともかく、上級学校進学面においては多少の割引が必要で、より正確には、第2代高木校長時代に京中に接近したとみるのが妥当であろう。その指標のひとつが4修である。龍山中学校4年修了で上級学校に進学した者は、1934年までは1桁であったが、1935年に初めて2桁に乗り、12名・12名・13名・13名・16名と年を追って漸増したのである（この間、学年定員は一貫して200名）。

学業成績の向上には龍山中学校なりの手立てがあった。それが、いわゆる「4組」と補習科である。エリートクラスとしての「4組」は4・5年生に適用されたから、入学定員が200名に増員された1922年の新入生が4年生になった1925年から組織されたことになる。『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』には、「この四年四組は所謂受験組であつて、始業時前と放課後に毎日一時間ずつ補習授業をした」⁽²⁵⁾、「四年のとき、四年から高等学校の入学⁽²⁷⁾試験すると意志表示をした者、十人には満たなかったと思いますが、これらを一般の四年生とは別の編成にして、自習室を当てがって下さり、入学試験に関係のない学科は、授業を受けないで自習室で自習することを許可して下さいました」⁽²⁶⁾といった記述がある。

「4組」は、受験準備には効果を上げたであろうが、その反動としての問題も生んだ。「恐らく竜中始まって以来の悪い組だった」という1926年度4年3組の行状は次のとおりである。

授業中飯を食べたり、椅子の足はストーブで燃やしたり、授業を妨害するため砲丸投げの鉄塊をころがしたり、先生が授業を始めると足を鳴らして先生に発言させなかったり、遂には掃除箱からバケツを持って来て打つ様なこともした。照屋先生の如き洋服を新調してくると万年筆のインクを背中にかけたりした。⁽²⁷⁾

また、1932年の4年生の慶州修学旅行では「4組」生に対するリンチ事件が発生した。その原因を、ある「4組」生は次のように語っている。

四年生のときの修学旅行で慶州に行ったとき、四組の生徒は先生方の宿泊してられる棟に泊り、他の組は別館に分かれていました。恐らく平常から何かと「四組」は特別扱いされていたようで、他の組の期友からは不愉快に思われていたのが、この宿泊の差別で爆発したのではなかったかと推察するが、我々の組の何人かに指名して、別館に呼び出されるというハプニングがありました。⁽²⁸⁾

過年度生（受験浪人）の収容学級である補習科は、1934年、京城中学校と龍山中学校に1クラスずつ設置された。淵上雄道は、龍山中学校補習科の担任当時を次のように回想している。前述したように淵上は龍中OBで京城帝大卒であり、このような人事配置からも、龍中には充実した補習科指導体制があったことが窺われる。

授業中一番私が気を使ったのは、いかにして皆の注意力を集中するかということであった。それには好奇心や緊張した気持を適宜与えることが大切であって、常に身体コンディションをいつも好調にしなければならない。例えば補習科の担任をやった時には、弁当を持ってこさせて午後はマイペースで一汗かくこと。跣足、上体裸、パンツが条件であったが、風邪をひく者は一人も無かった。⁽²⁹⁾

次に「スポーツ龍中」の一端を見てみよう。龍山中学校が運動競技に力を入れたのには、文武両道で鳴らした先発の京城中学校の向こうを張るために必要であったこと、後発校の士気を鼓舞するには運動競技が手取り早いこと、後述するようにそもそも龍山地区には尚武の気風があったことなどさまざまな要因が作用したであろう。

「スポーツ龍中」の名を、まず全朝鮮レベルで轟かせたのは水泳部であった。彼らが全朝鮮中等学校水上競技大会などで連覇（1938年まで11連覇）を重ねることができたのは、熱心な顧問教諭（大迫静二・萩原佐平）と自校プールがあったからである。次の引用は、1930年当時の水泳部員の龍中プールに関する思い出である。

あれは二年生のときでなかったかと思いますが、夜、大迫先生と萩原先生が父を訪ねて来られた事を覚えています。用件は父が土木会社に勤めている技術屋だったので、如何に安くプールを

造るかを相談に来られたのでした。その結果が、夏休み中の我等の勤労奉仕となったのでした。掘って、南山から石を運んで底にしいて固めるまで、すべて生徒が手でやって、後は専門の人がコンクリートを打ったのでした。当時学校でプールがあるのは城大だけだったと思います。水泳部が強かったのは自分達学友が作ってくれたプールを持っていたからではなかったでしょうか。⁽³⁰⁾

朝鮮にとどまらず初めて日本全国に龍山中学校の存在を知らしめたのは、陸上競技中・長距離の中村清（後の早稲田大学教授、マラソンの瀬古利彦選手らを育てた）である。とくに 1931 年の活躍は目覚ましく、全国中等学校陸上競技選手権の 800m、全国中等学校東西対抗の 1500m にいずれも日本中等学校新記録で優勝した。当時の追憶を中村は次のように記している。中村の活躍の陰には学友や教師（真玉菊雄）の暖かい励ましがあったのである。

土屋さんの指導を受けた私は翌年には朝鮮でトップになり、五年生の夏には東京で開かれるインターミドル（全国大会）の出場権を得た。だが、費用は一銭もない。見かねた真玉先生が五円となんぽかを出してくれた。あとは帽子の中に五銭、十銭と級友たちが貧しい小遣いをカンパしてくれ、やっとの思いで四十円近くの遠征費がまとまった。炊事婦をしている母の血のにじむような金もあった。

私が陸上競技に一生をかけ、陸上を通じ、これらの人たちに恩返ししようと決心したのは、昭和六年の暑い夏の日、京城駅から東京へ向かった一人旅の車中であった。

東京への旅立ちの日、京城駅には四、五百人もの校友が見送りに集まり声を限りに校歌を歌い、私の遠征を励ましてくれた。一人ひとりが忘れ得ぬ人たちである。

私は直立不動の姿勢でデッキに立ち尽くし我に返ったのは列車が発車してから十分以上も過ぎた時だったが、あの京城駅での校歌は、半世紀後のいまもなお私の耳の奥で聞こえている。心にしみわたり勇気を奮い起こしてくれる校歌であった。⁽³¹⁾

このほか、バレーボール部は 1936 年、全日本中等学校排球選手権大会で優勝し、野球部は 1937 年、朝鮮代表として甲子園大会に出場した。このように龍山中学校は、こと運動競技に関しては京城中学校を完全に凌駕し、在朝鮮「内地人」中学校の王座にあったといえることができる。

龍山中学校の「学校文化」に関してもうひとつ欠かせないのは龍山の環境である。龍山には朝鮮軍司令部と第 20 師団の師団司令部が置かれ、歩兵・野砲・工兵の各連隊が駐屯していた。龍中生は、軍靴の響きを聞きながら育ったといっても過言ではない。このため、上級学校進学においてもいつしか「陸士・海兵に強い竜中」⁽³²⁾という定評ができていった。そして、太平洋戦争が敗勢に転じた 1943 年には、「陸士に進んだ先輩が来て、後輩たちに決起をうながす演説をした。そうして現に、予科練などへの応募がすすめられ、仲間たちがつぎつぎ学窓を去っていた」⁽³³⁾という。

四．朝鮮社会との関連

『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』の発刊辞には、「日韓両民族の子弟があゝの龍山の地で同じ学舎に於て机を並べて共に学び共に語らったあの日」云々という一節がある。龍山中学校は内鮮共学だったというのである。しかし、その実、龍山中学校に在籍した朝鮮人生徒はごく少数であった。手元の『朝鮮諸学校一覧』から 1922～43 年の龍山中学校と京城中学校の朝鮮人生徒数を拾うと次表のとおりである。ちなみに、この間両校の生徒総数は、いずれも 1,000 名内外であった。

年	'22	'26	'29	'31	'32	'33	'34	'36	'37	'38	'40	'41	'42	'43
龍 中	9	12	19	31	20	19	15	10	13	13	13	26	32	31
京 中	26	39	32	32	31	24	31	22	24	20	22	22	25	22

ここには興味ある現象が見出される。京城中学校が 20～30 名台で横這いであるのに対して、龍山中学校は、1940 年までは京城中学校より少なかったものの、41 年以降逆転しているのである。ただし、その原因は不明である。

龍山中学校には、講師や嘱託としても朝鮮人教師はいなかった。これは、正式な朝鮮語教育が行なわれなかったことを意味する。初代校長福島亦八も、「内地人にして何等鮮語を解せざる者も直接鮮人と交渉なき者は大なる不便を感じざるを以て内地人が鮮語を学習することは自ら盛なるに至らず在留数年にして殆ど一語をも解せざる者も少からざるものゝ如し。其筋にては大に鮮語の習熟を奨励せられ居る模様なるも職務上の必要な限りは余程の篤志家以外に之を学習し熟得せる者稀なりといふ」⁽³⁴⁾と、評論家風の「朝鮮教育雑感」を記している。田舎育ちの生徒の中には朝鮮語のできる者もいた。しかし、それはあくまでも例外であった。ある龍中 0B は、「中学で水原や安養から通ってきていた同級生は、昔はおれも朝鮮語がペラペラだったといっていました、中学時代になると、全然しゃべれなくなっていました」⁽³⁵⁾と回想している。

龍山中学校 5 年生の修学旅行先は、1 期生が 5 年生となった 1921 年から満州事変が起きる 1931 年まで満州であった。彼らは、当時の日本人一般と同じく満州を「日本の生命線」と認識し、「よその国を勝手に取り込んで、自分のものらしく振舞う失礼さも、その時は気付かなかった」⁽³⁶⁾という。換言すれば、朝鮮は当然日本そのものだと思っていたわけで、植民地朝鮮の特殊性を意識する余地はないことになる。1944 年 10 月、予科練入隊で初めて内地の土を踏んだある龍中生（当時 2 年在学）は、「農夫が日本人であること（全く変な話だが教科書等で日本の農業、日本の農家を観念的には知っていたつもりでも現実には朝鮮人、中国人の農夫しか見たことのなかった私には奇異に思ったことは事実である）等々すべてが驚きの連続であった」⁽³⁷⁾と語っている。朝鮮で生まれ育った内地人中学生の朝鮮観を示すエピソードのひとつとして印象的である。

おわりに

「はじめに」で設定した課題への答えをもって結語に代えたい。龍中が「京中と肩を並べるに至った」というのは、こと上級学校への進学に関しては必ずしも正確でない。草創期には自他ともに認める格差があったものの、徐々にその差を縮め、1930年代の半ばには京城中学校にかなり接近したとみるべきであろう。ただ、龍山中学校には、陸士・海兵に強いという京城中学校にはない特徴があり、高等学校や大学予科のほかに陸軍士官学校・海軍兵学校を加味すると両校の差は微妙になる。

一方、運動競技面においては、全日本・全朝鮮レベルでの活躍からみて龍山中学校は明確に京城中学校を凌駕した。それは、学業面で京中に一籌を輸した分を埋め合わせたであろう。したがって、文・武両面を総合すると、龍中は「京中と肩を並べるに至った」ということができそうである。

龍山中学校教員の最大の特色は、その在任期間が長かったことである。初代校長福島亦八が14年、第2代校長高木善人が8年であったほか、歴代専任教諭のうち少なくとも29名は8年以上勤務したのである。彼らは、京中に追いつき追い越せを合言葉に龍中生の指導にあたった。龍山中学校が最終的に京城中学校と並び称せられるに至ったのは、彼らの文武両道にわたる指導の賜物である。なお、彼らの間に閥というべきものは見当たらず、龍山中学校教諭をステップとして他校の校長へというケースも数例はあったが、京城中学校の場合ほど多くはない。

註

(＊印はハングル文献)

- (1) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 龍山公立中学校同窓会 1988年 p. 185
- (2) 同 上 p. 9
- (3) 同 上 p. 175
- (4) 『京城日報』 1918年3月9日
- (5) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 295
- (6) 同 上 p. 18
- (7) 同 上 p. 188
- (8) 『京城三坂小学校記念文集 鉄石と千草』 三坂会事務局 1983年 p. 178
- (9) 『京中卒業五十周年記念誌 仁旺ヶ丘』 京喜会 1982年 p. 572
- (10) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 40
- (11) 同 上 p. 200
- (12) ＊『慶北中高等学校六十年史』 慶北中高等学校同窓会・慶北高等学校
1976年 pp. 275-276
- (13) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 177
- (14) 同 上 p. 15
- (15) 同 上 p. 213

- (16) 同 上 p. 101
- (17) 同 上 p. 181
- (18) 同 上 p. 167
- (19) 同 上 p. 211
- (20) 『京城日出小学校百年誌 わが赤煉瓦の学び舎』 京城日出小学校同窓会 1989 年
p. 121
- (21) 『京中卒業五十周年記念誌』 p. 307
- (22) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 53
- (23) *李 忠雨 『京城帝国大学』 多楽園 1980 年 p. 182
- (24) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 177
- (25) 同 上 p. 167
- (26) 同 上 p. 241
- (27) 梅本英夫 『徒然なるままに』 自家本 1984 年 p. 12
- (28) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 240
- (29) 同 上 p. 167
- (30) 同 上 p. 240
- (31) 同 上 p. 183
- (32) 『京城三坂小学校記念文集』 p. 254
- (33) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 288
- (34) 『帝国教育』 第 433 号 1918 年 8 月
- (35) 田中 明 『常識的朝鮮論のすすめ』 朝日新聞社 1981 年 p. 243
- (36) 『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』 p. 230
- (37) 同 上 p. 295

Ryûzan Middle School: A case study of a "naichijin" school in colonial Korea

Tsugio INABA

Ryûzan Middle School (est. 1918) was the fourth oldest middle school established for *naichijin* (Japanese living in colonial territories) in Chôsen (colonial Korea), and considered the second best in Keijô (K. Kyôngsông: present Seoul), very often playing second fiddle to Keijô Middle School (est. 1909). However, the general evaluation is that Ryûzan, led by its second principal Takagi Yoshito (office term: March 1932 - March 1940) drew closer to and caught up with its prominent rival. The main objective of this article is to trace this process.

One of the characteristics of Ryûzan Middle School is that most of its history (April 1918 - March 1944) was accomplished through the initiative of only three principals. This fact is indicative of the stability of the school, and the consistency of its educational policies. It is another objective of this article to clarify its uniqueness in terms of its administration and its management of teachers.

Actually, it is not correct to say that Ryûzan caught up with Keijô academically. To be more accurate, the academic gap between the two schools, which was immense at the time of Ryûzan's infancy, became quite slim by the middle of 1930s. In terms of sports, Ryûzan succeeded in excelling Keijô, and increased its reputation sufficiently enough to be on a par with Keijô overall.

It is noteworthy that teachers stayed for a considerably long time at Ryûzan. Aside from Fukushima Matahachi, the first principal, who was in office for fourteen years, and the second principal Takagi, for eight years, at least 29 out of the 95 full-time teachers stayed in Ryûzan for more than 8 years. Credit should go to these teachers for Ryûzan's rise, who guided students with the slogan of "Catch up with Keijô, run ahead of Keijô."